

都市型産業集積の新展開

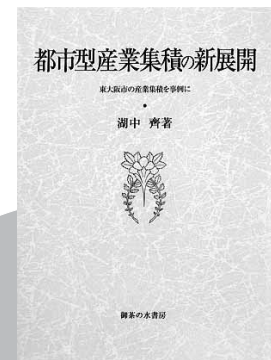
東大阪市の産業集積を事例に

湖中 齊 著
御茶の水書房

.....

評者

大阪商業大学総合経営学部教授
糸野 博行



近年、人工衛星の打ち上げなどで話題になっている東大阪であるが、この本の著者である湖中氏は、商工会議所に長年勤められ、東大阪を「中小企業の街」として一躍注目させた立役者とも言えるべき人物である。その湖中氏が長期にわたり地域の資料を収集・整理され、東大阪の産業集積に焦点を当てたものが今回の著書である。

本書の構成は、第一章から第三章までが歴史分析、第四章から第七章までが現状分析、第八章ではこれらをふまえて東大阪市が抱える問題と課題を検討されている。以下、簡単ではあるが章ごとに内容を紹介しよう。

まず、はしがきでは、日本の代表的な産業集積地である東京都大田区と東大阪市についてふれられ、両者に類似点があることを指摘した上で、「微妙な違い」もあるとされ、それらは「産業集積を形成してきた歴史的過程の違いによるところも大きい」としている。これをふまえ以下の章では、歴史的な形成過程をもとに産業集積分析がおこなわれている。つづく「序章 変貌する産業集積と東大阪市」では、分析を始めるに当たり、集積の類型を提示され、東大阪の集積を「都市型産業集積」であると位置づけ分析を始められている。

歴史的な分析である「第一章 木綿産業の発達とその分解」では、江戸時代までこの地域で中心的

な産業となった河内木綿の発達を描くことで、地域産業の基礎が築かれたことを示されている。さらに明治期にはいり近代紡績の導入によって河内木綿が衰退し、産業として分解していったこと、このことはまた一方で新産業も創出してきたことを述べられている。「第二章 近代工業の発達と地場産業」では、明治期以前から地域内に存在した河内鋳物および伸線産業が、大阪の機械工業と結びついて、多様な基盤産業と変貌してゆくことを示されている。またこの時代には起業家精神をもつ人材が存在し、新たな産業が興され、金属から雑貨まで多様な地場産業の集積が形成されてゆく様が描かれている。「第三章 都市型産業集積の形成」では、戦後復興により隣接する大阪市の工業が拡大し、それがもたらす公害や地価高騰によって企業が地域外へ転出する動きが見られ、東大阪へも工場進出が盛んにおこなわれたことが示されている。このように東大阪では、従来から存在する地場産業に大阪からの企業進出が加わり、多様な産業集積が形成されたのである。さらに高度成長期における生産の拡大は下請企業の独立開業を促し、東大阪に多数存在し始めた貸し工場が、その受け皿として役割を果たしたこと、いわばインキュベーション施設として貸し工場が機能したことを示されている。この時期、東大阪の事業所

数は増加し、都市型産業集積として成立したのである。

さて後半の現状分析である「第四章 変革期を迎えた産業集積」では、経済活動のグローバル化による企業の転出や輸入品の増加が、東大阪の地場産業へ多大な影響を及ぼし始めたことを述べられている。この「産業の空洞化」の進展にともない東大阪の集積も縮小し始め、地域集積の変化していること、そしてそのことで地域内に存在していた集積メリットも縮小してきたことを指摘されている。「第五章 都市型産業集積の特性」では、五つの基準を元に東大阪と大田区周辺地域との集積を比較され、東大阪は「複合型の地場産業集積」であること、大田区は「多元型の企業城下町集積」であることを指摘されている。さらに地場産業から出発した東大阪には自社製品企業が多く存在し、特定の市場で高いシェアを占める企業が多いことも述べられている。

「第六章 産業集積の活性化と商工会議所」では、東大阪商工会議所が取組んできた地域のモノづくり産業活性化についての事例が示されている。地域の活性化に当たっては「地域資源」が重要であるとし、東大阪には「人的資源」「多様な産業集積」「流通機能」「大学」の4つの資源があるとされる。そしてこれらの資源をコーディネートし地域活性化に結びつける商工会議所の存在を指摘されている。「第七章 都市型産業集積が抱える問題と課題」では、モノ造り企業の減少、住工混在問題など、都市型集積の問題点を示されている。そして東大阪をもとに都市型産業集積のもつメリット、デメリットについてふれられ、今後の課題としてイノベーションの創出、基盤技術層の

確保、苗床機能の問題等を述べられている。そして「第八章 都市型産業集積の新しい展開」では、これまでの現状分析をふまえ、これからの都市型集積がどのような新たな展開を持つべきか、問題点と具体的な方策が取上げられている。

さて本書の特徴として3点あげることが出来る。まず産業の形成 - 発展 - 衰退 - 次世代産業の勃興という歴史通観的な立場から東大阪の産業集積を分析されており、近年の取引関係の分析を中心とした地域分析とはひと味ちがう「厚み」のある集積分析をおこなっている点である。二つ目は、商工会議所に長年にわたり努められた経験から、地域中小企業に対する熱い想いや連携事例、中小企業活性化への方策などが具体的に描かれており、地域活性化を考える人々にも有益な内容となっている点である。

そして三つ目として、東大阪に特徴的に存在する「貸し工場」の役割を明確にしていることもこの本の特徴であろう。従来、ネガティブな存在として捉えられがちな貸し工場が、大阪の工業集積の拡大と呼応する形で、その時代のインキュベーション施設として役割を担ってきたという新たな事実を明示しているのである。

このように本書は、単なる地域産業集積の分析をおこなったものではない。長年実務に携わり、地域中小企業と向き合い中小企業の活性化、さらには地域の活性化を進めてきた著者だからこそ描けたものであるといえる。具体的な事例も多く読みやすくなっており、中小企業研究者や産業集積研究者のみならず地域研究を行なう人や、地域政策に携わる人など多くの人に読んでいただきたい本である。